

カズオ・イシグロの作品における「ノスタルジア」 についての考察

武富, 利亜

<https://doi.org/10.15017/1440986>

出版情報 : Kyushu University, 2013, 博士 (比較社会文化), 課程博士
バージョン :
権利関係 : Fulltext available.



論文審査等の結果の要旨

本論文は、日本生まれのイギリス人作家、カズオ・イシグロ（Kazuo Ishiguro, 1954—）の一連の小説に見られるノスタルジアの表現に焦点をあてて、登場人物がいだくノスタルジアの表現様式の特徴、ノスタルジアが小説の主題に対して持つ意味、ノスタルジアと作家の考え方との関係などを総合的に検討している。

イシグロが特徴的な生い立ちを持っているため、作品中の表現に、日本あるいは日本的なるものとのつながりを認め、そうした要素を作家の幼少期の体験に結びつけることによって、日本的なるものの表現の由来を実証・確認しようとする単発的な研究あるいは言及は少なくない。本論文も、長崎に生まれて5歳でイギリスに渡ったために人一倍強く感じるようになったと思われる、イシグロの日本や日本での幼少期の自己へのノスタルジアが着想になっていると考えられる。しかし本論文は、単に日本的なるものの要素や表現と作家の私生活上の経験の表面的なつながりを論じて事足りりとするのではなく、ノスタルジアという心理作用に注目しながら登場人物の精神的・心理的な動きの内部に踏み込むことによって、人物の造形にイシグロのノスタルジックな考え方の傾向が反映していることを見て取ろうとしており、そこに本論文の特徴を認めることができる。本論文の対象としているのは必ずしも日本的な要素ではなく、ノスタルジアの作用そのものであると言っている。

本論文は、「序」、本論七章、「むすび」に分かれる。

「序」では、本論文のモチーフと方法論について概説している。

第一章では、外国人日本研究家の文献、とくにラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn)が記述する日本人先祖崇拝や怪談、“Ghostly Japan”に表される日本のイメージなどと、イシグロの日本を舞台にした小説、*A Pale View of Hills* および *An Artist of the Floating World* を対比させて、その影響を考察している。本章の作業によって、イシグロの日本に対するノスタルジアが醸成される上で、外国人日本研究家の著作が刺激になったことが確認されている。

第二章では、デビュー作 *A Pale View of Hills* に焦点を当てて、そこに流れる悲哀感の正体を考察している。海外の研究者を中心とした先行研究では、悲哀感を「もののあはれ」や「幽玄」といった概念を用いて説明しているものが多い。こうした用語を使用した議論は、一般的な日本論に安易に依拠したものであるというのが本章の立場であり、*A Pale View of Hills* の根底に流れる悲哀感は、従来指摘されてきたような抽象的な概念で説明されるものではなく、かつて存在し親しまれてきたものに対する喪失の感情であると論じている。

第三章では、日本映画、なかでも小津の『東京物語』と『秋刀魚の味』を取りあげ、登場人物の感情表現の仕方やイシグロが見たと考えられる英語字幕にとくに注目し、これらの映画がイシグロの小説の書き方に影響を与えた可能性について考察している。先行研究においては、小津映画とイシグロの小説の類似場面を指摘してすませるものがほとんどで

あるが、本章での考察によって、イシグロが日本を描く上でこうした視覚的・聴覚的資料に大きく依存せざるを得なかったことが一定の説得性をもって説明されている。

第四章では、イシグロの小説 *The Remains of the Day* を取り上げ、主人公 Stevens が過去のイギリスに対して抱くノスタルジアにイシグロ自身の日本に対するノスタルジアの反映を見ようとしている。

第五章では、*The Unconsoled* その他の小説に父親と息子の確執がしばしば描かれていることに注目し、人格形成に多大な影響を及ぼす幼少期に父親と良好な関係を結べなかったことを悔いる人物群の描写に、彼らの取り返しのつかない幼少期へのノスタルジアの発現を見ようとしている。

第六章では小説 *When We Were Orphans* 中の孤児である主人公が成人後も他人との交わりに溶け込めないでいるという物語の展開に注目し、そこに幼児期へのノスタルジアの発現を見ようとしている。

第七章では、小説 *Never Let Me Go* 中の、クローンとして生きる登場人物が子供時代に過ごした施設が有刺鉄線で囲まれて中に入れなくなっているという描写を、子供時代は記憶の中にのみ存在するというメタファーであると解釈し、小説世界に広がる幼少期へのノスタルジアの感覚を確認している。

「むすび」で論者は、記憶というものが本論で考察してきたイシグロの小説の登場人物にとって共通して重要なものになっていることを強調し、記憶は、失われたものを取り戻したいというノスタルジアと一体となって人間に活力を与えるものである、と肯定的に捉えている。論者は、イシグロの文学作品がそうした内容を訴えているところに、大きな魅力を見出しているようである。

本論文では、イシグロの幼少期の原風景になったと思われる当時の長崎の街の様子や団地建設の状況なども調査されており、個々の具体的な風景を再現しようという志向も感じられる。そうした調査結果も論文の主題にかかわる基礎的情報として重要であるが、さらに重要なのは、ノスタルジアを強く感じる作家の心性が小説世界のノスタルジックな雰囲気醸成の醸成にいかにか作用しているかを考察することであり、本論文はその点において相当な成果を上げていると評価できる。本論文は、イシグロの小説におけるノスタルジアの表現の分析とその意味をかなり体系的に把握しえており、イシグロの小説の研究に学問的寄与を果たす業績であるとして、博士号（比較社会文化）を授与するにふさわしいと判断した。

試験又は学力確認の結果の要旨

甲 第 号 氏 名 武富利亜

調査委員
主査 西野常夫
副査 太田一昭
副査 小谷耕二
副査 飯田武郎
副査 廣田 稔

試験又は学力確認の結果の要旨

2014年1月5日午前10時30分より、JR博多駅ビル9階にあるJR博多シティ会議室において、武富利亜氏の博士論文公開審査を開催した。最初に申請者が博士論文の概要を説明し、続いて、論文の内容について、各調査委員と申請者の間で順に質疑応答が行われた。申請者は調査委員の質問に対して的確に答え、説明を補足した。公開審査終了後、論文の内容および公開審査での質疑応答について調査委員で合議し、その結果、申請者が博士（比較社会文化）の学位を授与されるに十分な学力を有すると判断した。